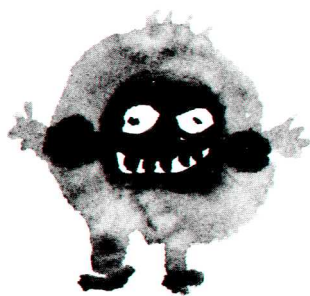


深夜草紙

五木寛之



part A

朝日新聞社

深夜草紙 PART 4

定価——八八〇円

著者——五木寛之



一九七九年五月二十日 第一刷

発行者——藤田雄三

印刷所——明善印刷

発行所——朝日新聞社 東京 大阪 名古屋 北九州

© H. ITSUKI 1979 0095-25472-0042



深夜草紙

PART

4



目次

時の流れ	9
メロン・ド・パリ	15
馬鹿な話	22
書評ふうでなく	27
全頭連ニュース	33
アフロフラメンコ	38
混乱せる人生	43
横浜ナマハゲ	48
最近の映画街	54
私の頭の体操	60
テレビと私	66
人それぞれ	71
東京大空襲のこと	77
ムロンとメロウ	84

大男と小男	90
還らぬもの	99
締切日の雑談	102
深夜の横羽線	109
母親のことなど	116
食生活と私	123
内灘の風景	128
ある収入	134
先週の目・耳・口	139
応援歌と小唄	144
唐辛子と低気圧	151
ホテルの片隅で	156
帽子と私	162
旅と本の話	168

夜の生活	173
桜桃と義齒	179
詩人の年譜	185
三十三年前の夏	192
身辺雑記	198
行き当りばったり	204
七八年八月十五日	211
長野県軽井沢	216
星組のスペイン戦争	222
小さな音楽の店	227
阿部薫の死	232
ヤング指向の時代	243
北海道にて	249
サーキット・スピーカー	256

よじれてほどけて 263

朱筆について 268

学徒ファンの弁 274

金沢の客たち 279

今週のおすすめ 284

コーヒー屋の片隅で 290

よかよか主義 297

不法妊娠と桜の木 303

年末の大掃除 309

あとがき 315

装画——村上豊
装幀——多田進

深夜草紙

PART
4

時のながれ

去年の暮れ、妹に会った。ひさしぶりである。この数年、年に二回か三回ぐらいしか会っていない。

妹の正確な年は知らない。敗戦の年か、その前年か、たぶんその辺で生れたはずだ。朝鮮から引き揚げてくる時には、背中にくくりつけてきた。成人するまでには、えらく苦勞した女である。九州の女のいいところの一つは、苦勞を表に出さない点だ。人に言えないような苦勞の中で生きていても、他人にはいつもケロッとした顔で対している。

私の妹もその点ではまぎれもない九州女で、いつ会っても冗談ばかり言って笑っている。肉親にも言えない苦勞もあつたはずなのだが、普段は素ぶりにも見せないから、こちらが氣が柔だ。

兄弟姉妹あつまって、愚痴のこぼしあいではやりきれない。それでなくとも、厄介な時代なのだ。去年の暮れ、妹と会って朝鮮焼肉を食に行つた。弟も一緒だった。一昨年暮れは、たしか

鮎屋に集ったようにおぼえている。

妹は頭を囚人刈りに近いショート・カットにしていた。食べても肥らないたちらしく、まだ中年肥りの気配はない。

会ったとたんに開口一番、

「わたしの髪、匂わんね？」

と、笑った。

「シャネルの何番とかいう香水もろうたから、頭からジャバジャバぶっかけてきた。くさかうが」

上京してかなりたつにもかかわらず、やはり九州弁の喋り方である。

「いや、べつだん匂わんぞ」

「そうね。そらよかった。上等の香水はすぐ蒸発するんじゃないか」

焼肉屋でタン塩とカルビをとり、ワカメサラダと、玉子スープと、オイキムチと、キムチと、チシャに味噌をのせたやつを注文した。

食べきれなくても、やたらと量を多く揃えるのが地方のやり方である。こういうのを私たちは、張りこむ、と言った。気張る、といった意味だろう。

年の暮れなので、私は大いに張り込んで大^{だいじんかぜ}尽風を吹かせた。焼肉屋でいくら張り込んでも、大

したことはないのである。

妹は結婚しているが、子供をつくらない。弟は子供どころか、いまだにチョンガーを通してゐる。

妹は最近、犬を一匹買ったと言っていた。弟も手頃なのがいたら、買ってみたいような風情だった。渋谷で犬のバーゲンをやっていた話になり、妹はこんなことを言った。

「犬はね、手でこう逆さにするしてみても、勢いよく跳ね上ってくる位がいいんだって。ぶらさげてぐったりおとなしいのは駄目なんだって」

まさか店頭で一匹一匹逆さ吊りにしてみるわけにも行くまいが、それくらいの事はやりかねない感じである。

「かわいいよう、犬は」

と、妹は目を細くして言った。その日、妹は知人からゆずってもらった服を仕立て直したとかいうスーツを着ていた。敗戦の年の暮れから三十二年たっていた。あの年の十二月は、平壤にいたのだ。母乳がないので、大豆汁を飲ませて、おむつなど一週間当てっぱなしだった。それが、ともにかくにもシャネルなどを頭からぶっかけて、犬の話に興じている。カルビも、少し残した。帰りにがらんとした喫茶店で、紅茶を飲んで別れた。別れぎわに、

「麻雀やる？」

などと生意気なことを言ったらしい。

高校を卒業すると、まず、私が東京へ出てきた。後に残した者たちのことを思うと、いつも気がめ入った。自分だけが郷里を脱出してきたことへの、負い目があったのである。

本当なら長男の私が、村の製材所にでもつとめて、弟や妹たちの面倒を見るべきだったのだから。

だが、私は上京した。東京の生活は辛かったが、それでも自由だった。やがて弟が上京した。当時、私は大学を途中でやめて、あちこち職を転々としていた頃だったから、弟に対してもどうも体裁が悪かった。弟の上京の時は、たしか銀座の電通で市場調査のアルバイトにやとわれていたのだ。

弟を電通の本社へ連れて行き、

「兄ちゃんは、ここで働いているのサ」

と、社内をエレベーターで上ったり降りたりした後、屋上に登って金網越しの東京を眺めさせた。

「ここからは、海も見えチャウんだからな」

まだその頃は、なんでもチャッタをつければ東京弁だと思っていたのである。

帰りに、社員食堂へ行き、セルフサービスの昼食を食わせた。社員食堂は本来なら正社員専用である。アルバイトの分際^{ぶんざい}で、しかも外来者まで連れているのだから、大いに氣をつかった。上衣を脱いで手に持ち、バッヂをつけていないのをごまかしながらのセルフサービスである。疲れチャッタなあ。

それからまた数年たって、妹が高校を卒業して上京してきた。このときはもっぱら弟が万事取りしきって面倒を見た。私はまだいささか生計が成り立たない時期だったらしい。

その後の妹の歩いてきた道は、あら筋だけしか知らない。いつ会っても、冗談を言っては笑う娘だった。私たち三人きょうだいの中では、いちばん苦勞しているかもしれないのだが、いちばん明るい。もっともそう振る舞っているだけなのかもしれないが。

妹はやがて新宿の紀伊国屋の近くの喫茶店でレジをやっていた。一度か二度、たずねたことがある。それからしばらくして、美容学校に入学した。やがてインターンを終え、しばらく働いていたようだが、美容師はあまり肌に合わなかったらしい。私も何度か実験台にパーマをかけてもらったことがある。たしか三木卓さんの芥川賞受賞パーティの前日で、その会の写真を見ると、三木さん、宮原昭夫さん、李恢成さんらと並んで、横田瑞穂先生の横に、雀の巢のような頭をした私が並んで写っている。

その後、妹は結婚した。それからしばらくして、玉川大学の通信教育を受けはじめた、と知らせてきた。その頃は私も小説で食えるようになっていたので、月謝を送った記憶がある。

あれから何年たつだろう。私が四十代半ば、弟と妹は共に三十代である。

新しい年を迎えるたびに、へ奇しくも命ながらえて、という気が毎年する。シラミだらけだった頭に、シャネルをぶっかけるのも、時の流れか。

(一九七八・一・六)